

高崎ユネスコ協会会長賞

平和をつなぐ

高崎市立佐野中学校 三年 福地 絢音

ボランティアをすること、募金をすることだけが被災地、そして被災者への手助けの方法だろうか。私はそうではないと思う。

二〇一一年三月十一日、私たちが忘れてたくても忘れられない、いや、忘れてはいけないあの震災が起こった。そう、東日本大震災である。私がまだ年長の頃の事だ。中学三年生になった今でさえはっきりと思い出せるあの情景、初めて体験した大きな揺れ。あの頃の私はその恐ろしさを知らなかった。地震という言葉さえ知っていたのかもわからない。そんな私でも八年前のことを覚えているのだから、大人はもっといろいろなことを覚えているのだろう。テレビでの報道、その後の各地への影響。私が忘れてしまったこともはっきりと覚えているはずだ。

私がこの地震の恐ろしさを知ったのは、震災から二年後の五月である。私は被災地である宮城県を訪れた。私が最初に目にしたのは、基礎だけになった家だった。周りを見渡したが何もない。元々何もない場所だったのかと思うくらい全て津波で流されてしまったのだ。私は信じられず、父に聞いた。

「これ、本当に家だったの。」

そこで初めてあのときの地震の恐ろしさを実際に目で見て知った。私は何も言うことができず、ただただ基礎だけを見つめていた。それしかできなかったのだ。そろそろ昼食だという時間だったのだろうか。私たちは少し先にあった小さな商店街を訪れた。そこは、全てのお店が仮設のものだった。周囲には仮設住宅が並んでいた。私たちは早速お店へ入り昼食を食べることにした。メニューで何を食べようかと選んでいるところに、一人の店員がお水を持ってきてくれた。小さい私は驚いた。自然な笑顔と「ごゆっくりどうぞ」という温かい言葉。大きな災害を受けたその人の顔が、まるで太陽のように輝いているのだ。私にとってはとても考えられないことだった。食べ終わって、お会計を済ませ外に出ようとした時、またあの自然な笑顔と、次は「ありがとうございました」というさっきよりも温かく感じられる一言。恥ずかしがりやの私でさえ「ごちそうさまでした」と言えたほど、あの人は私の心を温かく、そして笑顔にしてくれた。その後も多くのお土産屋さんに行ったが、どこのお店の人もお笑顔で迎えてくれた。そして最後に必ず「ありがとうございました」と言ってくれる。お店だったら常識かもしれない。でも、私にとってあの商店街で聞くその言葉は、何か違うものが感じられた。何も買わず申し訳なさそうにお店を出ていくお客さんにだって変わらぬ温かい言葉をかける。

「ありがとうございました。」

私はそのとき気付いた。彼らが生活していく上で一番嬉しく生き甲斐を感じるのは、津波で建物が流され何もなくなってしまうその地に、多くの人を訪れてくれることなのだと。町

がどんな状態になっても足を運んでくれる人こそが、この町を輝く平和な町へとよみがえらせてくれるのだ。

被災地には日本全国からボランティアが集まった。そして全国で募金活動も行われた。その地域の人にとっては、感謝してもしきれないほどだと思う。しかし、その全国のボランティアとして来てくれた人、一円でも募金をしてくれた人全員に感謝の言葉を伝えることは無理に近い。だからこそ、観光として訪れた私たちに言うのだ。助けてくれた全ての人には伝えきれないあの思いを、一人でも多くの人に。

「ありがとう。」

ボランティアや募金以外にも、被災者を支える方法は数えきれないほどあるはずだ。その中でも、彼らを一番近くで幸せにできる方法こそが、被災地を訪れ、被災者と会ってお互いの声を聞くということなのではないだろうか。言葉は耳で聞いて初めて相手の気持ちを知ることができる。これは、日本だけでなく、もっともっと広がり、世界中へと温かい幸せを届ける最高の方法である。

「人」という字は「人」と「人」とが支え合っていてできている。私は、何気ない一言から生まれた小さな幸せが、やがて大きな幸せとなって、全世界の全ての人々の平和へとつながっていくことを願う。